

荻野 富士夫著

## 『多喜二の時代から見えてくるもの』

——治安体制に抗して』

評者：梅田 俊英

最近の数年間に、小林多喜二『蟹工船』がブームとなっていることは周知のことである。そのなかにあつて、本書は「治安体制」という面から学問的に多喜二とその周辺をとらえようとしたものである。一冊に書き下ろされたものではなく、荻野氏が何年かにわたつて書かれた論文集のため叙述は多岐にわたつている。しかし、そのなかにあつて大きくは次の構成となつている。

- I 小林多喜二から見えてくるもの
- II 治安体制からみえてくるもの
- III 「横浜事件」から見えてくるもの

上のように3つの章立てとなつて、それぞれ論評が展開されている。しかし、本書はいわゆる通史ではない。したがつて「I」は多喜二の伝記ではないし、「III」からは「横浜事件」の通史を読み取ることはいささか難しい。結局、筆者は本書を通じて戦前から戦後にも及ぶ「治安体制」がいかに形成され、展開・変質していった（あるいはしなかつた）かについて叙述されたのである。筆者が『治安維持法関係資料集』の編集など、長い間治安体制の研究に携つてこられたその集大成的成果が本書といえ

よう。

「I」においては、多喜二の日記・書簡などを参照しながら、彼がいかにして社会主義者となつていたのかが述べられている。「社会主義による変革を確信することと相呼応して文学観も劇的に展開した」（66頁）とされている。また、本章では多喜二の映画好きにも言及されて興味をひかれるものとなっている。社会主義運動史のなかで多喜二をとらえるだけでなく、多喜二の人間性にも論が及んで、本書の価値を高めるものとなっているのである。

「II」においては、「治安体制」の成立・展開・変化について論じられる。冒頭には「治安体制」がいかに成立したかが扱われているが、いささか通史に流れている部分もなしとはしない。また、確かに戦前には強力な「治安体制」が存在したのは事実であるが、筆者も述べられている「抑圧と抵抗が対峙」というときの「抵抗の部分」の記述が少ないように感じられた。

「III」において、「横浜事件」を通して「治安体制」が論じられている。多喜二の事件と横浜事件とは同じ「治安体制」下のものという点では共通しているといえる。筆者が「神奈川県の特高をあまくみちゃいかんぞ。小林多喜二は、どうして死んだか、きさま知つとるだろう」（203頁）と引用されているように、多喜二の事件が弾圧に利用されてもいただろうが、評者にはいささか飛びすぎているように感じられた。二つの弾圧事件の間にも「治安体制」による弾圧事件はいくらでもあるからである。

さて、この2、3年間の「蟹工船」ブームには「異常」ともいえるものがある。「派遣切り」など、ひどい労働条件がその背後にあることはいうまでもない。また、「蟹工船」が名作であることも事実である。しかし、これまでプロレタリア文学など1頁も読んだことのない若者が懸命に読んでいる。そして「オレの生活、カニ

コー状態」と激しく共鳴しているのである。このようなことは、日本のプロレタリア文学史にはなかったことであろう。

このような現象が起こるにはきっかけが必要だった。それを作ったのは雨宮処凛らであろう。08年毎日新聞での高橋源一郎との対談、さらに『小林多喜二 蟹工船』（金曜日、08年7月 雨宮処凛解説・野崎六助解題、注記）の刊行がそれである。また、マンガの『蟹工船』（07年10月 イースト・プレス）もそれを促進したと言えよう。そういうなかで、新潮文庫『蟹工船 党生活者』は版を重ね続けたのである。

ところで、戦後日本のマンガは手塚治虫から始まるというのは皆が認めるところであろう。手塚ほか多くの漫画家が少年・少女マンガの名作を世に送り出した。しかし、50年代後半になって日本の漫画界に変化が訪れる。57年に辰巳ヨシヒロがはじめて「劇画」という言葉を使う。59年には白土三平が「忍者武芸帳」を刊行する。こうして、マンガというジャンルは子供のものから青年のものへと変化していったのである（もちろん、子供マンガの世界も現存する）。こうして成立した青年マンガは当初必ずしも評

価の高いものではなかった。海外でも「ジャパニメ」は「エロ・グロ・暴力」ものとして低くみられていた。しかし、82年に宮崎駿『風の谷のナウシカ』が出た頃から内外の日本アニメ・マンガの評価が変わっていくし、アニメ・マンガの質も向上していった。こうして、現代では表現手段の一つとして「マンガ」というジャンルが成立したのである。マンガ『蟹工船』刊行もこの流れでとらえることができよう。08年10月には91年刊行の『劇画 蟹工船 覇王の船』（集英社）が復刊された。

本書は、以上のようなブーム状況のさなかで刊行されたものである。「多喜二から「託されたもの」—あとがきにかえて」を読むとわかるが、著者の周辺でも『蟹工船』にたいする若者たちの反響には大きいものがある。こうした中で本書は「多喜二の時代」とは何であったのかを教えてくれるものとなっているのである。（荻野富士夫著『多喜二の時代から見えてくるもの—治安体制に抗して』新日本出版社、2009年2月刊、254頁、定価2,500+税）

（うめだ・としひで 法政大学大原社会問題研究所

兼任研究員）